79

中島宗仙の阿蘭陀取油法について
――文政2年宗仙長崎遊学時の写本――

中島　洋一[1)]，松村　紀明[2)]
[1)]医療法人洋友会中島病院，[2)]帝京平成大学ヒューマンケア学部看護学科

平成19年日本医史学会秋期大会のシンポジユウム長崎遊学に於いて発表した「中島宗仙の筑紫行雑記」の中で宗仙が長崎で書き写した写本がある．この内製薬に関する写本は，阿蘭陀流取油法，吉雄先生聞書，阿蘭陀流薬味集，崎陽吉雄献作先生膏油水方書，紅毛流吉雄伝水薬方などであるが，本発表は，この内「阿蘭陀流取油法」を中心に文政年間の阿蘭陀流製薬方について考察したものである．

1）中島家について
瀬戸内市邑久町北島の上寺山の山頂に天台宗余慶寺と豊原北島神社が神仏習合の形で共存しているが，中島家はこの北島神社の社家より分家して享保年間上寺山山腹に居をかまえた在村医である．宗仙は中島家二代目中島玄古の十男として安永3年（1774年）にうまれた．寛政元年（1789年）父玄古が亡くなり，兄貞侃も寛政9年に亡くなったため家業を継いだ．享和元年（1801年）京都で吉益南涯に古方を学び，そのほか外科，産科を学んだ．

2）宗仙長崎遊学
宗仙は文政2年45才の時蘭学修学のため長崎に遊学した．この間留守を作州百々村の門人草刈堅二が診療している．宗仙が長崎で写本したと思われる文書が10冊残っている．その内阿蘭陀流製薬に関する写本が五冊ある．

3）阿蘭陀流取油法について
阿蘭陀流取油法は写本の中で唯一図の記載があり，取油法について詳細な記述がみられる．

4）蘭学時代の製薬について
宗田一の日本製薬技術の研究（日本医史学雑誌　第11巻3号）蘭学時代の製薬装置によれば，加熱装置，冷却器，蒸留機，油水分離器などが詳細な図と共に記載されており，宗仙の写本と一致する点が多い．日本製薬技術の研究の中で「紅夷外科宗伝」を出典とした図は宗仙の図と出典を同じくしたものと思われる．

5）宗仙の持ち帰った酒瓶2個
宗仙が長崎より土産に持ち帰ったと伝えられている2個の空瓶は一般にオランダのジュネーバ（ジンの原型）の空瓶とされており，（石田純郎編著，蘭学の背景）宗仙の阿蘭陀流取油法の中の図に形状が酷似しているものが5カ所あり，宗仙が写本をしたときに，この図からジュネーバの空瓶を意識したことは十分かんがえられる．これから先は想像の域を出ないが，宗仙はこのジュネーバの空瓶を国に持ち帰り，長崎で勉強した製薬法を試みるつもりではなかっただろうか．

6）スピリトサアルモニアの製法
ヘッス（無病童子の小便）四百目を鍋に入れて半量まで煎じ，サアルモニア（粗塩）二百目をレトルトに入れて一昼夜煎じ，レトルトの口よりフラスコに移る精液をとる．

主治　補心，気脾，中風，婦人産後，てんかん人事不省の時これを嗅がせる．

このフラスコに相当するのがジユネーバの空瓶であろう．

7）結語
45才の宗仙がはるばる長崎まで行って学んだ蘭学は実用的な物が多い．特に製薬に関する写本はいずれも現実の疾患治療のため役立つものである．当時の在村医の診療に関する真摯な気持ちが表れている．